

いんてる

所 谷本日本内
クラブ市日
ラホク区日
正者新宿1-6
本校都田町
発行 1-6
日本東京
エディターズ
スクールの内
(260)5891

横文字の諸問題

京都産業大学教授
矢島文夫

本稿は一九七五年三月十五日に校正者クラブで行なった講演の速記原稿を要約し、若干書き足したものである。講演では前半に「オリエント諸文字」（楔形文字と聖刻文字）を説明したが、本稿ではスペースの関係で割愛し、本論の「アルファベットの歴史」および若干の補論の部分のみにとどめた。

*

皆さんのお仕事の間で横文字の知識が必要になったり、問題があったりすることから、どちらかというと実的な知識としての面を聴きたいというお話でしたが、私

自身は歴史的なほうを専門としていますので、今回は主として横文字の歴史についてお話し、多少私自身が感じていた問題点を付け加えるということに致しました。

*

横文字というのはアルファベット文字体系と言いかえてもよいと思いますが、このアルファベットというのはフェニキア人が作ったと大抵の教科書に書いてあります。フェニキア人の故郷レバノンが文字の創案者フェニキア人の国ということ誇りにしています。しかしいわゆるフェニキア文字もその起原は必ずしも明らかではありません。ところが、この原形にあたると思われるシナイ文字というのが一九〇〇〜一九〇五年頃にイギリスの考古学者ピートリによって発見されました。発見地はシナイ半島の南、セラピト・エル・ハーディムというところですが、第一図はその一部で、イギリスのガーディナーとか、アメリカのオールドライトらによって研究されました。第一図の左から図形を見ますと、同じものが四番目にも出て来ますが、これは「羊飼の杖」なんです。これはヘブライ語でラ

ムダというので、をを表わしていると考えられる。二番目は「家」なので、ヘブライ語ではベート、すなわちをを表わしている。次は真中に点がありますが「眼」を表わしています。ヘブライ語ではアイン、しかしこれは母音ではなくて特殊な子音を表わしています。最後の図形は「しるし」、つまり羊につける焼印を表わしており、ヘブライ語でダウ、すなわちをを表わしています。この十字のしるしは中世には文字を知らない人がサインのかわりに用いています。さて、最初のとはセム語では「…へ」という意味になり、全体では「パアラトへ」、つまりパアラトという女神に何かを捧げていることを表わしています。こうしてシナイ文字が解説され、今日ではほぼアルファベットの祖型にちがいないと考えられています。さて次には「アルファベット対照表」第一図（二図）を見ていただきます。一番左側が今お話したシナイ文字、次がここから直接派生したフェニキア文字です。一番右側には、アルファベットの祖型を解釈したものが示されています。1の牛、2の家は問題ないですね。3（ギリシア文字のガン）

は「ラクダ」とするのが伝統的な解釈ですが、シナイ文字の形を見てもラクダには見えません。むしろこれは「投げ棒」(プーメラン)だという解釈があります。4はシナイ文字には出て来ていないのですが、ヘブライ語でダレト(ギリシア語ではデルタ)は「戸口」を表わします。5、7、18のようか?をつけたものは解釈に異論があるものです。6はたぶん遊牧民のテントをつないだ「くい」です。8、9にも若干異論があります。10、11の「手、掌」は問題ないですね。12はすでに説明した「羊飼の杖」です。13は「水」、14は砂漠にも多い「蛇」、15は「魚」、16はすでに述べた「眼」で、これは一種の母音を表わしていますが、のちに母音oを表わすようになったものです。17は「口」でp音を表わしています。これはギリシア文字のバイになったもの。18は今でもヘブライ語やアラビア語では使われているがヨーロッパでは使われない強いe音(ツのような音)を表わすもの。19はa(Q)を表わす文字ですが、ギリシア語では使われず、ラテン語の表記で復活しています。これらとは狼が棒のうえに座った形だといわれますが、異説もあります。ギ

リシア文字ローではpの形をしており、これがそのまま使われているのがロシア文字のp(エル)ですね。21の解釈についても異説がありますが、ギリシア文字シグマは原形を保っています。22はすでに述べた「しるし」という文字です。ついでに言えば、23以下はギリシア文字、ラテン文字、ロシア文字、アラビア文字でそれぞれ付け足した文字で、その一部についてはのちに触れます。

こういうふうに見てゆくと、アルファベット文字のかなりのものの原形がシナイ文字で説明できることになりました。しかし若干問題があるように思われます。その一つは、シナイ文字の発見地は山奥のきわめて辺鄙なところなので、このようなところで世界的発明がなされたとは考え難いということです。シナイ文字そのものも字形がひどく拙劣だと言えます。おもしろいのは、この文字とともにエジプトの象形文字が記されていることです。さきに例を掲げたのはバアラトという女神を表わすもので、これは西セム民族の愛の女神を指します。ところがエジプトの文字はエジプトの愛の女神ハトホルを指すものなので、同じことを

二つの言葉で記したと思われます。つまり、エジプトの影響があったことは明らかです。このあたりはいわゆるソロモン王の銅山の近くで、きつと鉱山の労働者たちが住んでいたにちがいません。しかしここでアルファベット文字が発明されたのでしゅうか。

それに対する一つの答えになりそうなのがピブロス文字といわれるものです。これは一九二九年に発見されたもので、青銅板といくつかの石碑でしか残っていません。一九四五年に刊行されしきに解説されました。解説の方法についてはいろいろ書かれているので省略しますが、問題は字数が非常に多いことです。文字記号の数が七十六個もあります。これはアルファベット式ではなくて、われわれのカナ文字のような音節文字式だということですね。この文字はフェニキア語に近い西セム語の一種を表わしていました。これらの言語には基礎的母音としてはア、イ、ウの三種しかないので、しかし子音がかかり多いのでこのような数になるわけです。

これが音節文字だということは、原理的にはエジプトの象形文字の用法と同じだと

いうことですね。しかも、字型にもかなりの相似点があります。こうした点から見て、このピブロス文字のほうがアルファベットの原型であつて、シナイ文字はすでにアルファベット方式が確立してからのものを覚えていたピブロスあたりの人が書いたものではないかとも考えられます。第一に、ピブロスのほうはエジプトと始終交渉があつたところで、有名なレバノン杉はこの港からエジプトへ輸出され、エジプトからはナイル河畔に生える草で作つたパピルスが大量に輸入されてきました。ピブロスというのはパピルスから来たことと言われています。

さて次には「アルファベットの系譜」(第四図)をごらん下さい。「エジプト象形文字」と「太古シナイ文字」「ピブロス文字」のあいだは点線で示されていますが、これは今まで述べたように何らかの影響があつたのではないかと考えられるからです。もっとも今の私の考えでは、この図の「太古シナイ文字」と「ピブロス文字」は順序を入れかえるべきことになりそうです。

この前後に太古パレスチナ文字と呼ばれる断片的な文字遺物がありますが、その位

置づけはあまりよくわかりません。それからフェニキア文字となりませんが、最古の文字遺物にしてもそれほど古いものは見つかっていません。シナイ文字は紀元前一七〇〇〜一六〇〇年のものと思われませんが、フェニキア文字は紀元前一〇〇〇年にさかのぼれる遺物はごく少ないと思われます。しかしフェニキア人がこの地中海で活躍し、このアルファベット文字を広めたことは確かです。フェニキア人はカルタゴとかスペインのカディスとかフランスのマルセイユとか、あちこちに植民地を作りました。さきほどの「アルファベット対照表」で見ますと、フェニキア文字とギリシア文字がかなり似ていることがわかると思ひます。ギリシア人はフェニキア文字を借りて、これを自分たちの言葉を表わせるものに作りかえました。その一つは母音を表わす文字を作つたことで、たとえばアルファはフェニキア文字では一種の子音を表わしていたものをアという母音を表わすものにしたわけです。他に5、8、10、16がそれぞれエ、エー、イ、オを表わすようになり、さらに23(ユ)、27(オー)が付け加えられました。24、25、26は付け加えられた子音文字

です。6(もとのワウ)はのちのギリシア語では消えましたが、ホメロス以前の古いギリシア語ではW音として用いられていました。これはのちにラテン語でFとして復活します。

実際の問題として、皆さんのお仕事の校正のなかでも、ギリシア文字および、この系統のロシア文字は使われることが多くなつて来ているので、字形だけでも覚えてほりうがよいでしょう。「対照表」でギリシア文字とロシア文字を比較してみると、似ていることがわかりますね。3、12、17、20などについて特にこのことがいえます。

次にアルファベットの流れについて少しお話します。まず東方への流れを見ますと、フェニキア文字の次にアラム文字というのが出て来ますが、東方のアルファベット系文字のほとんどはこれから分かれていきます。アラム語というのはイエス・キリストの言葉として知られています。たとえばマタイ伝・ルカ伝の両方に出て来ますが、確かなつてからイエスは「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」(神よ、神よ、なぜわれを見捨てたもう)と言つたとあります。これはアラム語ですが、この時代にはかなり広く使

わかれていた言葉です。そののちアラビア語が広まって、だんだん消滅しましたが、今でもアラム語を使っているところがシリアに数カ所あります。アラム文字から直接に派生したシリア文字というの、レバノン・シリア・イラクのキリスト教徒の一部の人たちによつて今でも使われていますが、とにかくアラビア文字がイスラム圏では優勢です。

アラビア文字やヘブライ文字は、今の皆さんは使う機会が少ないかもしれませんが。ヘブライ文字の第一字(アールフ)は数字の記号として出て来るぐらいでしゅうし、アラビア数字といっているものはアラビア経由でヨーロッパに入ったものですが、もとはインド起原でアラブの創り出したものではありません。しかし最近アラビア語熱が高まっております、アラビア活字を揃える印刷所も現われていきますから、いずれ出版物でも使うことが多くなると思います。アラビア語文庫を出そうとしているところもありますし、辞書の計画もあります。こうなると特別な校正者が必要となりそうです。東方世界にはインド・東南アジアのさまざまな文字、チベット・モンゴルなど中央

アジア・北アジアの文字、あるいはカフカスのグルジア・アルメニア文字といったよりな多様な文字体系があります。これらもすべてアラム文字から派生したものです。インド・東南アジアでは、もとのアルファベット式からふたたび音節式(カナ文字式)になり、字数がぐつと増えたり、字形が複雑になつたりしています。これらについては機会があればまたお話しすることにして、次に典型的な横文字であるラテン文字の流れに移ることにしましょう。

ラテン文字がギリシア文字と似ていることはいうまでもありません。といつても、それぞれ「大文字」を並べて見たときで、いわゆる「小文字」はかなり異なっています。ギリシア文字といえは、われわれはまず小文字のほうを思い出しますが、これはずつと後期に発達したもので、ラテン文字の場合でも同じことが言えるわけです。そして活字印刷が現われたときに両者ははっきり分かれるわけですが、これはのちの問題です。とにかく大文字と小文字の区別は、第一には書字材料の違いによると考えられてよいでしょう。石などにていねいに刻みつけたものが大文字であり、パピルスなど

にペンをを使って書いた草書体が小文字になつてゆくわけです。

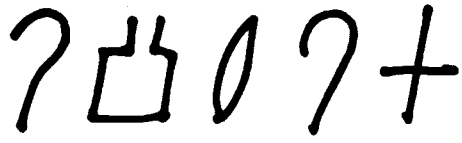
さて、アルファベットの流れのなかに一つ問題があります。というのは、ラテン文字はギリシア文字からまづぐ取り入れられたかといふと、どうもそうでないように思える点があります。つまりローマ人はアルファベット文字を隣接していたエトルリア人から取り入れたのではないかと思えるのです。エトルリア人の名は中部イタリアのトスカナという地名とか、チュレニア海というような地名にも残っていますが、このあたりに紀元前一〇〇〇年頃から数世紀にわたつて住んでいた系統不明の民族です。エトルリア人のアルファベットでは、古典期ギリシアでは使っていないFの字を使っています。ラテン文字ではこれを取り入れてあります。そのほかにいろいろのつながりがある。エトルリア語では清音と濁音を区別しなかつたらしく、クでもグでもCで表記していたので、初期のラテン文字でも共通で使っている。CとGの区別ができるのはかなり後のことです。ついでながら、このエトルリア語といふのは文字は読めるが

第3図 ビブロス文字



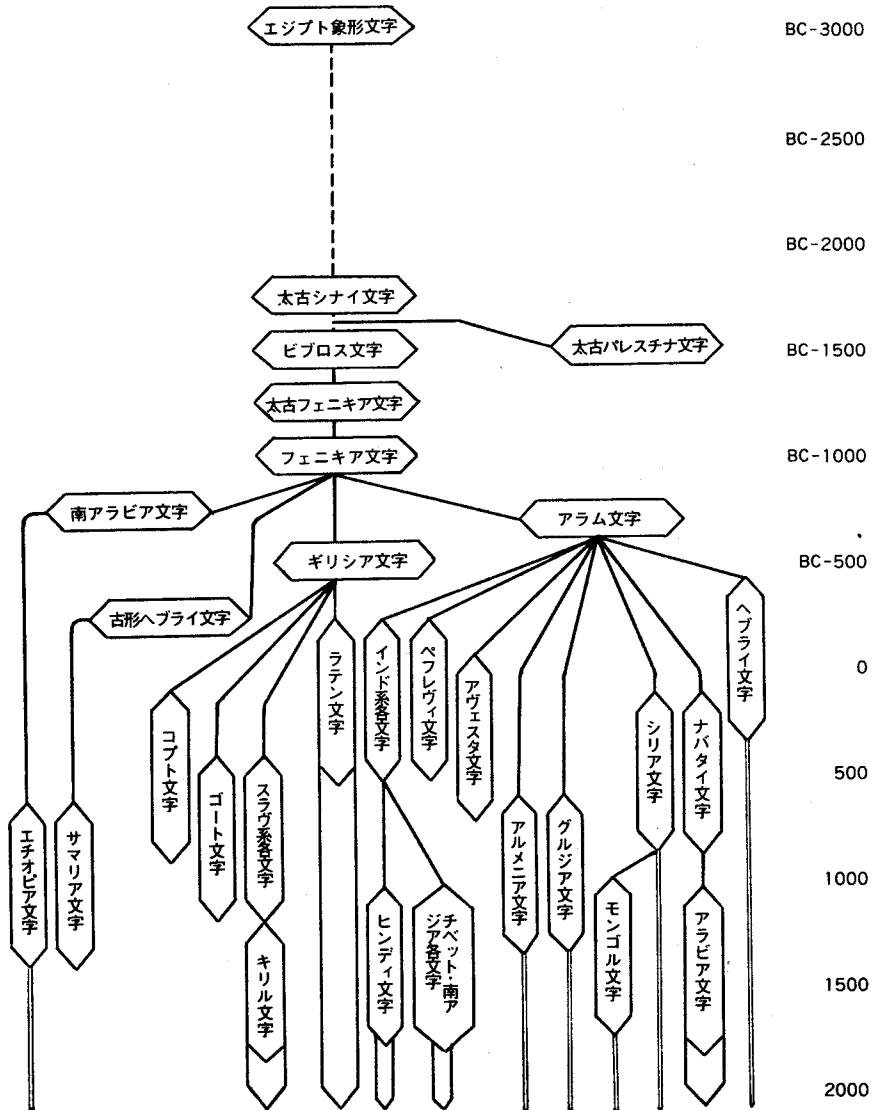
右から b - š - n - t
「……年に」

第1図 シナイ文字



l - b - c - l - t
「バアラトに」

第4図 アルファベットの系譜



意味があまり通じない未解説言語として有名です。

こうしてラテン文字が成立すると、あとは今日まであまり大きな問題もなく、今日に至っています。ローマ時代にすでに立派な字体が作られ、今日の大文字活字字体の基礎となっています。このあいだに、先ほどふれた小文字の形成があり、さらにヨーロッパ各地の地方的字形が形成されてゆきますが、これには種々の文化史的要素がからんでいると思います。

ローマ字の字形の変化をもたらしたものの一つに書字材料の変化があると思います。ローマ時代にすでにかなりの人たちが字を書くようになり、学校ではロー板のようなものがよく使われたようですが、文書として残すためにはエジプトから輸入したパピルスが使われていました。パピルスはナイル河のほとりに生えている草の茎を重ねて固めたもので、表面を石などでこすってなめらかにしています。どうしても凸凹があるから崩れた草書体が生じます。このことは古代エジプト時代にすでに起こっており、石に彫った記念碑体の象形文字からヒエラチック(神官文字)やデモチック(民

衆文字)という草書体が出ています。このパピルスはフェニキア人やギリシア人によってヨーロッパにも輸出されました。レパノンの古い港町ビブロスのことはすでにふれましたが、この名はこのパピルスから出たといわれています。ローマ帝国が分解してヨーロッパに中世諸王朝が林立するようになったころにも、パピルスの使用は続いていました。フランスの公式文書では六五九―六七七年頃までは使われていたのに、そのうち使用されなくなる。なぜかというところ、この時期以後にイスラム教下のアラブの勢力が北アフリカからイベリア半島にまで入りこみ、地中海をおさえてしまつたからです。そのため、書字材料としてはもっぱら羊皮紙(パーチメント)を使うようになる。パーチメントという言葉は小アジアの都市ベルガマ(ベルガモン)がなまつたものといわれ、このあたりで上等のものが作られていたようです。羊ばかりでなく牛の皮も使われるが、どうしても高くつくので、王宮や修道院で重要な文書をコピーするものに限られるし、一度書いたものの表面をけずり取ってまた使う(パ

リセストと呼ばれる)ことも多かつた。ここでは、太いペンで書かれた字形が丸みを持つて来ます。有名なものではシナイ半島の聖カタリーナ修道院で発見された『新約聖書』のギリシア語原本「シナイ・コデックス」があります。

ところがそうするうちに紙が登場します。紙は中国で発明されて広く使われていたが、アラブ人が中央アジアで中国人と戦つて勝つたタラス河の戦いとき、中国人の技術者を捕虜にします。ほぼ西暦八〇〇年頃のこと、このあとサマルカンドに製紙工場が出来て、アラブ世界でも紙が使われるようになります。製紙術は北アフリカを通過して一世紀にはスペインに入ります。こうして比較的安価な書字材料が広くゆきわたるようになり、文字を書く量がぜんぜん増えました。

さてこれから印刷術の発明まで、あまりめぼしい変化もありませんが、印刷術を生み出した文化的背景を調べていると、面白い問題にぶつかります。スペインでは八世紀から一五世紀末までアラブ・イスラム文化が続き、多くの文化的遺産を残していますが、とりわけ一〇世紀のコルドバは当時の学問文芸の中心地でした。この頃のことを細かく見てみると

アブドゥル・ラハマン三世の頃には一種の印刷のようなものが行なわれており、各地に送る公文書に使われていたということ。御承知の通りグーテンベルクの発明は一四五〇年頃ですから、これよりかなり以前のことです。私としては、紙とともにある種の印刷技術もアラブ・イスラムがヨーロッパへもたらしたものとこの感じがしています。とにかく活字というものは、字をバラバラに記す中国で考えられたことにちがいがなく、そうしたものは東洋に早くにあったものですから、それが何らかの形で伝わったのではなからうかと思えます。

さて、印刷の文化史は詳しく見ていけばきりがありませんが、最初ドイツで始まったものが急速にイタリアのヴェネチア、フランスのバリなどに伝わり、それぞれのところで活字が作られるようになる。ここに至って、やっと現代につながる問題が出て来るようになります。

まずグーテンベルクが使った書体ですが、有名な『グーテンベルグ聖書』のサンプルが示しているように、これは当時使われていたゴチックで、これは言うまでもなく、私たちが使っているゴチという名称となっ

ています。ドイツではこの系統の文字がずっと使われ、いわゆるフラクトール体（亀の甲文字）として好まれてきましたが、最近では詩集など以外にはほとんど使われなくなりしました。イタリアに入って、一四六七年前頃に現われたのがアンチック体で、古いローマの書体をもとにした明るく読み易いものですが、これが今の横文字の基本をなしているわけです。このほかに北イタリアのヴェネチアで生まれたのがいわゆるイタリアック体で、これは今ではもっぱら斜体として一種の区別用書体（文中の強調とか書名の表記など）に使われていることは御存知の通りです。

ここでは欧文活字についてあまり詳しく申し上げるスペースはなく、それにもっと専門の方がお話しすべき問題だと思えますが、もう少しだけお話ししましょう。皆さんにとつてある種の活字の名称は常識になつていていると思います。欧文を扱っている印刷屋さんの見本帳にはガラモン（正しくは単にガラモン）とかパスカービルとかポドニーというような字体がありますが、これらはみんな最初にこの活字を鑄造した人の名前をわけです。たとえばガラモンはフラ

ンスではじめて活字を作つた人で、一五四〇年頃のことですが、今もつてこの系統の字形が改良されて使われています。それからロンドンの活字業者として有名だったものにカスロンがあります。一六九六年から一七六六年にかけて数多くの活字を作っています。一七三四年に作つた見本帳というのがありますが、これには各種のラテン文字のほかにギリシア文字が何種類もあり、他にヘブライ文字とかシリア文字とかアラビア文字が入っています。特にアラビア文字はイギリスではじめて作られたもので、これでアラビア語の聖書が印刷されています。これらの活字の多くは、このようにキリスト教の布教活動と関係があるわけで、文字と宗教とは実は密接に結びついていることを示しています。

この他にイギリスのガラモンといわれるパスカービルがあります。カスロン、パスカービルは今日の日本の欧文活字の基本になつていようです。つまり日本の欧文は英米系ということになり、ガラモン系はあまり使われていませんが、フランス系ではポドニーが入っています。そのフランスではジドー（ディド）というのがよく使われ

ていますが、これは日本には入っていないようにです。

これらの活字の字体には、それらがもとにした写本の字とのつながりという文化史的な問題があるわけで、活字になつてからの字体の変遷とともに、活字の歴史という未開拓の分野があつて、研究者を待っています。レタリング関係の方は字体を参考にすると、という意味で関心を持ちますが、歴史的知識としても重要だと思ひます。

活字の問題の一つに大きさの問題がありますね。私たちが使っているいわゆる「ポイント」は、今まで見て来たフランスとイギリスの活字では大きさに違いがあります。日本では一ポイントが七分の一インチ、まあ〇・三五一ミリとありますが、フランス式では〇・一九ミリです。つまり初期においては、活字の大きさにしてもバラバラなわけで、これを統一しようという動きはフランスから出ています。ジドーが一七五五年に規準としたものが〇・三七五九ミリのものだといわれます。日本では御存知のように号数活字とポイント活字との流れがあつて、それがポイント式に統一されて来ているわけですが、ヨーロッパでも製作

者による違いがあつて、それに種々の名称を付けています。それらのなかでエリートとパイカというのはタイプライターの活字の大きさとして残っていますし、ルビーというイギリス活字（アメリカではアゲート）はもと七号（五・二五ポイント）を指していたものが日本で漢字の読み方を指示する特別な用法となつたのですから面白いものです。ついでながら、さきほど紙がアラビアからスペインを経てヨーロッパに入つたことを話しましたが、この紙の単位を日本では「連」（れん）と言っています。これは英語のリムムから来たものですが、この語原を探るとスペイン語のレスマからさらにアラビア語のリズマにまでさかのぼれます。これは紙を巻いたものを指すので、これがのちに紙の分量の単位になつたわけですが。このほかにも、皆さん御存知のクワタとかジョスとかマルトというような込め物の名は、すべて英語から来ているわけで、こうした印刷用語の歴史も調べてみれば面白いものです。

最後に実務的な問題点について思ひつくことだけを申し上げます。たとへば、皆さんのお仕事に一番関係ある横文

字文献の表記法についてですが、はっきりした規準がないのはまったく困ります。ヨーロッパの文献学のなかでは、中世以来の方式があるようで、著者・書名・地名（出版地、ラテン名）、年代と来て、地名と年代のあいだにはコンマなど入れないのが正式と思ひますが、この方式は今ではほとんど守られていません。地名だけでは利用者に不親切だから出版社を入れるほうがよいし、年代も初版だけでは今入手できるかどうかかわからないので多くは最新版（リプリントを含め）を入れるようになっていきます。こうした点は著者が細かく調べて記さなければならぬことですが、必ずしもそうでないようです。一般にもっと書誌学の知識が必要ではないかと思ひます。

また外国の文献表記では、書名は原則としてイタリック、著者名はスモール・キャピタルというのが多いようですが、日本では印刷所によつてはこれらの活字（とくにスモール・キャピタル）が常備されていくて組めないということもあります。

私自身、オリエント諸語の表記で使う特殊横文字ではいつも苦労しています。一般

（次頁下段へつづく）

参考文献紹介②

日本古典文学

高橋慶子

ここ数年日本古典文学の校正に携わっているが、平安ものが多いため、その時代を中心に、私が日常たよりにしている文献をご紹介します。

中古文学といえは舞台がおかた京都。「都名所図会」(人物往来社)「京都叢書」(臨川書店)「京都名所図会」(白川書院)手軽なものとして旅行に持ってゆく「京都区分地図帳」(日地出版)が役立つ。「故実叢書」(吉川弘文館)に入った「大内裏図考証」にもお世話になった。この叢書には「江家次第」「西宮記」「舞楽図説」などありがたい資料が揃っている。

服装に関しては「日本衣服史」(芸興堂)が分りやすい。「王朝の彩飾」(東京美術)には草木染の裂地がのって、襲色目が視覚的に分り、女房文学の抒情的な宮廷調和美の世界もかくやと思われればかり楽しむ本である。

人物については「国史大系」(吉川弘文館)に入った「公卿補任」「尊卑分脈」など。「補任」必ずしも信憑性はないが、一応のより所としている。公卿は三位以上であるから、国司どまりくらいの下臈はどう調べるか? 「群書類従」によって多少は分る。なお「群書類従」は正篇が出番が多い。

平安時代の官職官制は「官職要解」(明治書院)が分りやすい。「読史総覧」(人物往来社)もいろいろ重宝する。

仏教関係は「仏教大辞典」、手軽には、「日常仏教語」(中公新書)がよい。

和歌に関しては「国歌大観」「続国歌大観」「八代集抄」「夫木和歌抄」「和歌文学大辞典」など。和歌は同じ歌でも伝本によって違うので、二・三種あることにしている。「桂宮本叢書」(養徳社)「西本願寺本三十六人集精成」(風間書房)「図書寮叢刊古今和歌六帖」(養徳社)をよく使う。

なお、資料さがしについては「国書総目録」(岩波書店)に感謝している。活字本の有無、叢書目録など一覧できてありがたい。古辞書のたぐいは「和名抄」「名義抄」、時代が下って「古本節用集」「俚言集覽」

(前頁よりつづく)
に印刷の技術は発達し、版面は以前のものと比べればきれいになりましたが、活字の整備という点では、日本はまだまだおくれしているという感じがします。

＊

アルファベットの起原という世界的な問題から、身近な現実的問題に行きついてしまいました。この中間にいわゆる横文字、あるいは文字一般についての実に多くの問題が横たわっているわけで、お仕事のかたわらにこれらの面についても関心を持っていただければ幸いです。

「倭訓栞」「日葡辞書」。「日本国語大辞典」(小学館)は通時的で文例が豊富で親切なもの。「源氏物語辞典」(平凡社)も重宝する。

文学の関連領域として「国語学辞典」(東京堂出版)が時々登場する。
影印本を読む際の座右の書として「変体かな字典」「五体字類」「くずし字解説辞典」を並べている。美術関係は、東博・京博・奈良博監修の「日本の美術」(至文堂)、「原色日本の美術」(小学館)「日本絵巻物全集」(角川書店)などが目を楽しませてくれる。